



INDEX

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| 1) 今月の1枚: 「ダルエスサラーム・マラソン大会」 | 3) クリコニ?: 6月のできごと |
| 2) JICA in Tanzania: 財務省 在外専門調整員 | 4) JichoのJicho: 「初地方出張」 |
| | 5) カリブ・クワヘリ |

(1) 今月の1枚: 「ダルエスサラーム・マラソン大会」



6月21日、ダルエスサラーム市で携帯電話会社Vodacomが主催するマラソン大会が行われました。

5キロと21キロレースが行われたこの大会、スタート地点の国立競技場周辺は朝から交通規制がひかれ、サッカーの試合もないのに人だかりです。タンザニア人に混じて他国から来たらしき人もちらほら見かけ、その数全体では5,600人といったところか。皆、ランニングシューズです。

その中に「Changamoto」と背中に書かれた黒Tシャツが目立っている集団が！実は、協力隊員二人で企画した、完走ラン

ナー数によって寄付1口の額を決めるというチャリティに賛同してくれたランナーたちです。日本人30名、タンザニア人11名の賛同をいただき、5キロ32名、21キロ9名、全員が完走を果たしました。ランナー以外にも約60名の方から寄付を頂くことができました。寄付金はエイズ支援NGOの職業訓練の運営と小学校の机購入に使わせていただきます。寄付を届けるまでがこの企画。私たちの「changamoto = (挑戦)」はまだ続きます。 (ダルエスサラーム 青少年活動 花房隊員)

(2) JICA in Tanzania: 対談 「財務省 在外専門調整員」

今回は、対談です。タンザニアの援助協調の流れと同時期に始まったタンザニア政府財務省外国援助局への在外専門調整員派遣。2003年に初代で派遣された古川さんと、現在3代目で活躍中の高村さんに話を聞きます。

坪池: こんにちは。本日はお忙しいなか集まっていただき、どうもありがとうございます。

さっそくですが、お二人に財務省の中の外国援助局の仕事に関して伺いたいと思います。

古川: はい。簡単に言うと、外国援助局はタンザニアに対してどの国がどんなプロジェクトにいくら出しているのかを把握します。外国援助局は4課に分かれており、援助協調課、二国間援助課、多国間援助課、東アフリカ関係援助課があります。私たちのいる援助協調課は外国援助局のシンクタンク的な部署でドナー援助のデータ管理や分析を行っています。他の3つの課は国の援助の窓口としてドナーとの交渉を行ったり、二国間援助の文書作成や管理、署名式の準備や立会いを行ったりしています。その関係で、タンザニア援助協調戦略の策定やフォローアップも担当しています。

高村: 予算策定でも大きな役割を果たしているのが私たちの部署だと思います。

対談者: (タンザニアでの経歴)

- 古川美晴(ふるかわみはる)さん:
財務省在外専門調整員(2003年5月~2006年8月)
企画調査員(地方行政担当)(2008年2月~現在)
- 高村智子(こうむらともこ)さん:
財務省在外専門調整員(2007年11月~現在)
青年海外協力隊(村落開発普及隊員、アルーシャ)
(2005年8月~2007年8月)
- 坪池明日香(つばいけあすか)さん: (対談進行役)
JICAタンザニア所員(援助協調・公共財政管理担当)
(2005年10月~2009年6月)
- 萩原烈(はぎわられつ)さん: (対談コメンテーター)
企画調査員(援助協調・公共財政管理担当)
(2008年5月~現在)



坪池: 国家予算の4割が援助予算という状況で、援助協調課がなかったとしたら、さまざま援助はなされているけれども、蓋を開けてみると、目指していたものと違う方向へ行っていったということもあり得ますよね。例えば、教育には多額の援助が入っているけれどもインフラにはいっていなかったなど。4割の予算を把握して調整していくことはとても重要と思えます。

古川: そうですね。タンザニアが援助協調の先進国と言われるようになったのも、援助協調課があったからこそ、とも思えます。

坪池: そういう意味では、タンザニア政府にとってもドナーにとっても重要なセクションですね。



坪池所員

坪池: 古川さんと高村さんの時代では、ドナーの数はそれほど変わっていないかと思いますが、TAS (Tanzania Assistance Strategy) から JAST (Joint Assistance Strategy for Tanzania) へと変わっていき、一般財政支援 (General Budget Support :GBS) の額も少しずつ増え、プロジェクトをやめて財政支援にシフトするような動きをしていた中で、流れが変わってきたと感ずることがありますか？

高村: 私が仕事を始めた一年半前と比べてみても、一般財政は確実に増えています。でも同時に、プロジェクトも変わらず続いていますね。

古川: GBS は私が仕事を始めた2003年頃と比べると総額で倍以上になっていますね。終了時の2006年頃にはGBSを増やせ！増やせ！という勢いがあり、毎年増えていったのだと思います。でも最近、「プロジェクトも必要じゃないか」「GBSでは現場への支援が届かない」ということがドナーも政府もわかってきているようです。プロジェクトの重要性が見直されていると、今はドナーの側にいる人間として感じます。財務省ではどうでしょうか？



古川企画調査員

高村: 昔はプロジェクトからGBSに移行していましたが、今では、実際にインフラ省にGBSのお金がどばっと入っても、目で確認できるハードものができない。その点プロジェクトでは現場に入って物ができてしまう。そういう点をプロジェクトのよさとして政府側も理解しているようです。

坪池: そういう動きの中で、ドナーとしての日本って財務省ではどんなイメージをもたれていますか？

高村: 技術協力が多いのので有名ですね。私の局の人たちは、親日派が多いです。JICAの地方自治研修などで日本へ行った人も多く、日本人の温かさや強引ではないところ(笑)が好まれています。

古川: 私の当時は、「日本って何をしたい国？」とわからないイメージがあったようです。でも今はGBSに20億円も出すなどの実績をみせています。情報開示、報告のパフォーマンスも良くなってきました。当時は四半期ごとに報告が必要だったのですが、日本は遅れずに提出し、調査書なども「日本人らしく」てきぱきと締切厳守で明解な回答を出す。誠実なイメージがアップしてきたと思います。

高村: 同じようなコメントを財務省の日本担当者も言ってます。仕事やる上で、确实、締切厳守、手順をしっかり守るなど、日本人の誠実さがでているそうです。

坪池: ルールをころころ変えるようなこともしませんね。(笑)

坪池: ところで、高村さんはアルーシャで協力隊員を経験、古川さんもタンザニア生活が長いですが、財務省で働いて「えっ?!」と思うことはありますか？

高村: タンザニア文化がしっかりと根付いていますね。第1は、どれだけ仕事が忙しくても自分のことが優先。例えば、髪がくずれてきたからと仕事中でも美容院へ出かけて帰ってこなかったり…。

坪池: !…髪型はやはり重要ですか？

古川: そうですよ！週1回は美容院へ行って髪型を変えますよね。ただ基本的には週末に行くのが普通ですが…。

高村: 他には、やはりコネ社会かなと思います。インターン生なども職員の身内が来ることが多いです。コネのある人は気に入られて長くなります。

あと不思議なのが、職場に商売を持ち込むことですね。同僚がキテンゲ(布)を売っていたり、ニワトリも…



JICA 事務所での対談



古川: そうそう! 私、卵買っていましたよ! ついでに卵を入れるトレーも買わされました! (笑)

坪池: あらら…。これは高村さんの隊員時代もあったことですか?

高村: …う～ん。あまりなかったですね。やはり財務省職員のほうが経済的に余裕があるのか…。

古川: 私が財務省でびっくりしたのも、やはりコネです。例えば、秘書とドライバーにコネがないと業務が滞るのです。当時は外部への電話は全て秘書に頼まなければならない、人間関係がないと頼んでも後回しにされたりします。外へ出かけたときも、ドライバーとの関係がよくなないと車が使えず、通り道なのに拾ってもらえないといったことが起こります。

坪池: 悪く言うとコネ、よく言うと人間関係が重要ということですね。

坪池: ところで、ドナーとの接触も多いと思いますが、不思議なドナーっていますか?

高村: 援助協調局でデータ管理の業務をしているのでドナーとやり取りすることもあるのですが、その中で提出が遅かったり、態度が悪かったり、というドナーもいますね。

3人: 例えば…?

高村: 名指しすると…“オレ様”世銀とか…(笑) USAID とか…。彼らは本当に情報公開しないですね。

突然次官を訪れて強引に交渉をしたり。協調型のドナーは、日本もそうですし、UNDP とか。UNDP は政府寄りのドナーのイメージです。ドイツも柔らかいドナー。アイルランドは優等生です。データ提出もすごくきちんとして

いるし、交渉するときもタンザニア政府の意見を尊重します。ただ、基本はその時々を担当者によると思います。

坪池: 古川さんの時はどうでしたか?

古川: 私のときは世銀も USAID もデータはきちんと出していましたね。

高村: えー! (笑)

古川: やはり担当者によって変わってくるんですね。

坪池: 日本も Good Performer と言われながら、実は担当は私で…時々遅れています(笑)。反省です。

坪池: 最後に、高村さんから今後の期待などを。

高村: 今 Hottest な取り組みは、Aid Management Platform というのを導入しています。これは全関係者がデータを web 上で入手できるシステムです。昨年2月から取り組み、今年9月に開始できるように向かっています。

ただ残念なのは、このプロジェクトに関わっている人間がとても少ないのです。5年、10年先まで、この素晴らしいシステムが生き残っているかわからない。情報公開という素晴らしい名目なのですが、必ずしも全てのドナーがこのシステムに賛同しているとは一概に言えず、まだまだ課題があります。私もこのプロジェクトの立ち上げからずっと関わってきたので、やはり持続して欲しいと思います。

坪池: コメンテーターとして参加していただいています、萩原さん。昨年タンザニアへ来られて約1年になりますが…。

萩原: はい。援助協調は、2000年代前半に始まった時はとても勢いがありました。その実施をしてみるといろいろな問題も出てきて、プロジェクトがそのまま残ったり…という現実が残っていますね。JAST もとても良いものだけでも、当初の熱は冷めてきていますね。こういう移り変わりが、お二人の仕事の中にも見られます。

財政の40%を占める外国援助というものをタンザニア政府自身がいかにかに管理し、計画し、実施し、モニタリングしていくのかという重要な役割を援助協調課は担っていると思います。本来は、タンザニア政府がマネジメントできれば、ドナーによる援助協調などは必要なくなるのですよね。こういった理想の世界に近づくためには、援助協調課の役割は重要です。

坪池: 皆さま、どうもありがとうございました。

今回は、援助協調課の重要性がよくわかり、タンザニアで仕事をする上で大切なことを聞かせていただきました。

対談付録

坪池所員はパモジャ6月号で紹介したとおり、7月1日に4年弱の任期を終え、タンザニアを離任しました。今回の対談でパモジャ登場最後になりましたが、対談者3名より、坪池さんへのメッセージです。

萩原: 生き字引的、いや生きるシンクタンクの坪池さんが離任されるのは、とても残念ですが、次の部署での大活躍を期待しています。

古川: 財務省時代から現在の企画調査員としての業務まで、とてもお世話になりました。援助協調をわかっている人だったので、とても仕事がやりやすかったです。

高村: 私も隊員として坪池さんとは、ほぼ同じ時期にタンザニアに来ました。様々な分野にわたるクロスカッピングな話ができるのが坪池さんでした。




高村在外専門調整員



(3)く・り・こ・に? 6月のできごと

ここでは、6月のJICAの活動を紹介します。Kulikoni? とはスワヒリ語で「何があったの?」の意味です。Karibuni!(ようこそ!)

青年海外協力隊の活動 -6月には多くの隊員がダルエスサラームに集合し、様々な活動が行われました-

6月12日: 19年度1次隊 8名  キクウェテ大統領へ表敬&夕食会
表敬訪問では、緊張した雰囲気の中はじまったものの、大統領の冗談などでなごやかな雰囲気となり、大統領から、ボランティアにとっても期待していること、そして感謝の言葉をいただきました。とてもチャームなお方で驚きました。このような機会に出席することができ、光栄です。

キクウェテ大統領とおの食事会では、各地に隊員がいたこともあり、スワヒリ語でその土地の部族、食べ物、生活環境、インフラ状況など、普段タンザニア人と会話する内容を話していたためか、相手がキクウェテ大統領であることを忘れてしまいました。また奥様は元教員であったこと、私の任地であるムトワラに2週間前に出張して中等学校を訪れていたようで、個人的に充実した内容のお話をすることができました。(19年度1次隊 理数科教師 山田樹里)

<http://www.jica.go.jp/tanzania/office/information/event/090612.html>



6月22-23日: 平成21年度 隊員総会
2日間にわたり、全国の隊員54名が参加し、年次総会が開催されました。活動上の確認事項や隊員同士の意見交換、ディスカッションなどが行われました。日々の問題や活動の目的などが確認できた有意義な総会でした。

6月9日: エイズ対策部会 定例会開催
エイズ対策、青少年活動、感染症対策に取り組んでいる5人の隊員が活動報告を行い、HIV/AIDSに関する情報や意見の交換をしました。また、ケニアで「フィールドワーカー養成コース」の研修を受けた隊員からは、社会調査・参加型アプローチ・PCMの説明があり、研修を受けていない隊員もその概要を学ぶことができました。今後の活動に活かしていければと思います。

6月15-16日: タンザニア教育研究会 定例会開催
教育分野に関係している隊員17名が集い、活動報告、タンザニアの教育の現状、タンザニア人の生徒に対する奨学金制度の同会の運営などに関して話し合いが行われました。

6月18-20日: 自動車部会 定例会開催
各隊員の活動報告と8月に予定されている自動車整備の教員に対するワークショップの企画が話し合われた他、タンザニアの自動車整備の現状を知るために初めてTOYOTA Tanzaniaを訪問し、ガレージの視察と関係者との面談を行いました。

6月25日: 村落部会 定例会開催
村落開発隊員の減少により村落部会存続の危機にあった昨年12月中旬に部会継続を決定してから、はや半年が経過。手探りの状態で再出発し部会としての方向性を模索していく上で、より良い情報交換の場になることを期待して定例会を開きました。現在部員は8名、地域も活動形態も異なる村落開発普及員の活動報告は新鮮で、これから活動をしていく上でヒントを各々が少なからず得られたのではないかと思います。本年度は9月以降にスタディーツアー、12月に定例会を予定しております。肩の力を抜いての村落部会再始動。今後の動きに Stay tuned!
(20年度2次隊 田中博崇)

6月24日: 中間報告会 (19年度4次隊9名、20年度1次隊12名)
昨年3月と6月にタンザニアに着任した21名の隊員が、約1年間の活動を振り返り、活動報告を行いました。今回は人数が多いためにグループに分かれて各人の報告とディスカッションを行った後、JICA事務所長にグループごとの報告を行いました。職種や地域は異なるものの同じ時間をタンザニアで過ごしてきた仲間で情報を共有し意見交換をすることによって、残り1年弱の活動への良いスタートとなったようです。



(4) JICHO の JICHO : 「初地方出張」

(渡辺次長)

Jicho はスワヒリ語で 1 つの目です。JICA タンザニア次長担当コーナーです。6月に着任した渡辺次長のデビューです。

6月2日に着任し、またたく間に一か月が過ぎましたが、念願の地方出張で、南東部のキルワとムトワラへ協力隊事業の関係で行ってきました。

最初に来たのはムトワラ空港。ムトワラをベースとする若林フィールド調整員(FC)とともにキルワに向かって 300 キロの道を北上していきました。キルワへの道は一部工事中の区間はあるものの比較的快適。驚いたのはとにかくバオバブの木が多いこと。ひと山まるごとバオバブというような地域もあり、不思議な景色でした。車もひと気も全くないような区間もかなりあり、タンザニアの広さを実感しました。私が以前勤務していたウガンダの場合、首都カンパラから三、四百キロ行けばケニアやルワンダとの国境まで行けたのですが、タンザニアでの 300 キロの間隔というのはちょっとした隣町という感覚でしかなく、タンザニアの広大さを改めて認識しました。



キルワの街中



キルワの世界遺産の看板 沖合いの島がそれ

到着したキルワ(キルワ・マソコ)はこじんまりした地方の町。しかしながら、すぐ沖に浮かぶキルワ・キシワニ島は 9 世紀から数世紀にわたりアラブ系商人の交易の拠点として成長を遂げた大きな街だったとのこと。今は廃墟のみとなっていますが、その史跡は“Ruins of Kilwa Kisiwani”としてユネスコの世界遺産(文化遺産)にも登録されています。今回は、船着場から沖合いのキルワ・キシワニ島を眺めるだけで我慢し、キルワへの新規隊員の派遣可能性について調査を行いました。

キルワ県庁では、水分野やコミュニティー開発分野でのニーズ調査を実施。基本的には隊員受入れに対して大変ポジティブでした。具体的な隊員の業務内容までには要望が煮詰まっている状況にはなかったのですが、今後派遣ニーズを見極めた上で要請につなげることは十分に可能と思われました。

また、既に若林 FC が話しを進めているキルワ中学校では、現在 580 人の学生数に対して校長を含めた教師は 7 名のみ。理数科教師は校長のみであり、理数科隊員への期待は非常に高く、かなり真剣でした。期待が高いのは良いのですが、仮に隊員を派遣できたとしても、隊員一人でもなんでもできるというわけではないことを認識してもらう必要があると思いました。

キルワ FDC では、自動車科を新設するため自動車隊員が要望されています。現在のところ訓練機材などは無い状況ですが、次年度までには予算確保が可能とのこと。自動車整備人材の養成は、キルワでも需要の高い分野であり、隊員派遣への強い希望があるものの、自動車以外の 5 学科で生徒が 25 名という小規模校であり、適切な人数の生徒の確保と施設予算の確保は派遣の前提条件と認識しました。

今回の地方出張で特に感じたのは、当然のことながら地方における地元の人たちとのコミュニケーションの重要性です。やはり地方では英語だけではなかなか厳しいなと感じました。若林 FC はスワヒリ語を使って、どのレベルの人とも自然に会話をしながら、どこのオフィスにも入って行ってしまう協力も引き出してしまふ。これは本当にすごいと思うと同時に、スワヒリ語をやらなければと改めて感じた次第でした。

今後、少しでも多く、地方の人々や事業の現場、隊員活動の現場に迫っていきたくと思いました。



キルワ中学校 校長と若林 FC



(5)カリブ・クワヘリ ~ よこそタンザニアへ! お元気で! さよなら~

~ !! よこそ !! ~

6月25日にタンザニアに到着した青年海外協力隊21年度1次隊8名が、現在ダルエスサラームで語学訓練中です。代表して Mbeya に配属予定の佐々木紀恵さんよりメッセージです。

初めての海外生活、タンザニアの文化やスワヒリ語など…不安で一杯のままタンザニアに着きました。しかしJICA事務所の方々や先輩隊員の皆さんが温かく迎えてくれたので、とても安心しました。

Mbeya は米や野菜が美味しいと聞き、楽しみです。

スワヒリ語は不安ですが、現地の子供たちと沢山触れ合う中で、色々吸収していきたいです。

21-1、8名。これからそれぞれの任地に派遣されてしまいますが、どんなに離れても心は1つ! それぞれが任地で自分らしく活動していきたいです。

7月16日に着任する丸尾信所員です。

はじめまして。7月16日に着任する丸尾 信と申します。JICAには2002年に社会人採用で入り、今まで国内の部署を歩んできましたが、今回ようやく待ち望んだ在外赴任ということで、大変楽しみにしています。

タンザニアには、学生時代に1度遊びに来ましたが、今まで業務で訪問する機会はありませんでした。今回は、経済発展・国民生活の基盤となるインフラ分野を担当できるということで、楽しみであると共に心引き締まる思いがしております。家族と共に赴任しますので、仕事以外でも奥深いタンザニアの魅力を感じられればと思います。よろしくお願いいたします。

協力隊班に新しい調整員が加わります。

はじめまして。ボランティア調整員の高島淳と申します。

国際協力の仕事をしてみたいと思ったきっかけは、小6の時に読んだUNHCRのRefugeeという広報誌でした。ガリガリの難民の写真を見て強いショックを覚えました。紛争や難民への興味は続いて、1996年にイギリスに留学した後は日系大学で平和学の講義を受け持ち、2005年から2007年まで日本赤十字社のスマトラ沖津波復興事業に携わりました。日赤での上司が協力隊OBで、素晴らしい指導を受けました。

そのような人材を生み出した協力隊事業に今回加わることができて大変うれしく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

JICA タンザニア事務所: P.O.BOX 9450 Dar es Salaam
Tel: :255-22-2113727-30、 Fax: :255-22-2112976
<http://www.jica.go.jp/tanzania/>

リレーエッセイ

~ Rafiki yangu 私の友だち in Tanzania ~

(20-2次隊 金原規修さん)

男の中の男である彼の名は Bwムスハ
いつも村のために奥さんと一緒に働く **まじめな男**、
しかしすでに奥さんが2人もいるのに
「もうひとり欲しい」とつぶやく **スケベ**、
いや、**愛のある男**
そんな彼だが、残念なことに
7月でムピングを去ってしまう
いろいろ教えてくれてありがとね ムスハ



今回は、ザンジバルのガンダムオタク
中野さんです。

パモジャ(Pamoja)編集部: 皆様からのご意見や、
Goodな情報の提供をお願いします!

adachifumiko.tz@jica.go.jp



